

今年度の主な特徴

地域社会とのつながり

図1は、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えている」という地域や社会に関わる活動の状況等に関する質問の回答について、平成25

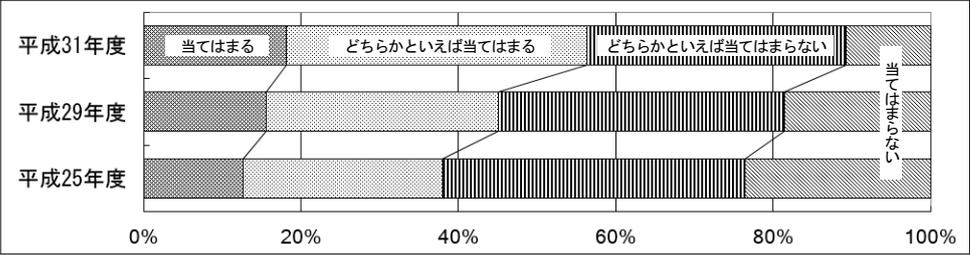


図1 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えている

年、29年、31年の3年分の経年変化です。肯定的に回答した児童の割合が増加し、6年前に比べておよそ18ポイント高くなっています。地域のことを考える児童の割合が増えてきた背景には、総合的な学習の時間で、私たちの身近な地域の課題に取り組んだり、松本版コミュニティスクールでの取組から、児童が地域の一員として大切にされていることを感じ取ったりしていることなどが要因であると考えます。

先生との関わり

図2は、「先生は、授業やテストで間違えたところや理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」という質問の回答について、平成28

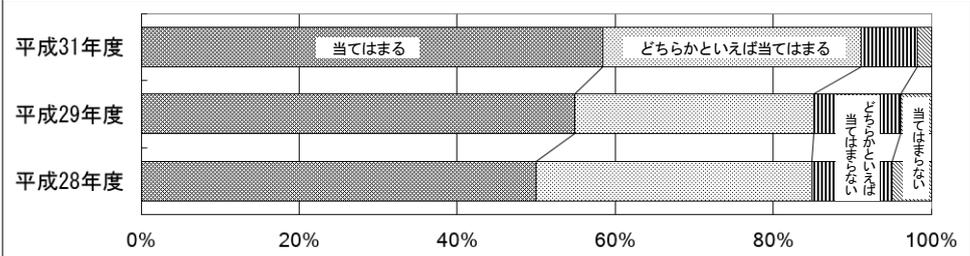


図2 先生は、授業やテストで間違えたところや理解していないところについて、分かるまで教えてくれる

年分の経年変化です。肯定的に回答した児童の割合が、3年前に比べておよそ7ポイント高くなっています。これは、各校で授業改善の観点「見とどけ」を実践してきた成果であると思われます。また、子どもの実態に応じた特色ある家庭学習や予習・復習などの取組も数値に反映している可能性もあります。今後は児童が更に主体的に学習に取り組み、課題解決に向かっていかれるような関わりを大切にしていける必要があると考えます。

学力状況と生活・学習実態との相関関係

主体的・対話的な学習と正答率

図3は、「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか」の質問についての回答と各教科の平均正答率との相関図です。身近な集団生活の中から自分たちが感じた課題意識のもとに、友との関わりを通じて考えを広げ、解決を図る活動をしている児童ほど正答率が高くなっている傾向があります。

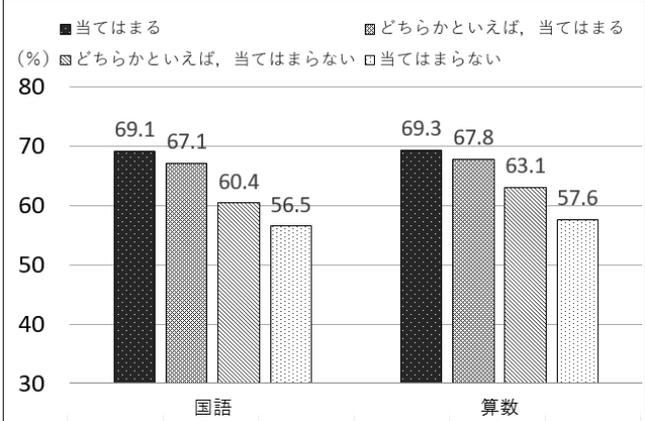


図3 「学級生活をよりよくするために学級会〔学級活動〕で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている」と平均正答率

また、図4は、「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいるか」との回答と各教科の平均正答率との相関図です。道徳でも同じように、自ら課題意識をもち、友と関わりながら考えを深めていく学習を行っている児童ほど正答率が高くなっています。

学級活動や道徳の授業を進める上で大切にしたいこととして、次の2点が挙げられます。まず、取り上げた課題が子どもたちにとって、自分の生活や生き方に関わるものと捉え、考えていくものとなっていること。そして、その課題解決に向けて、友などと互いに意見を述べ合う機会を設けていることです。これにより、主体的・対話的で深い学びを実現し、より確かな学力を身に付けることができると考えます。

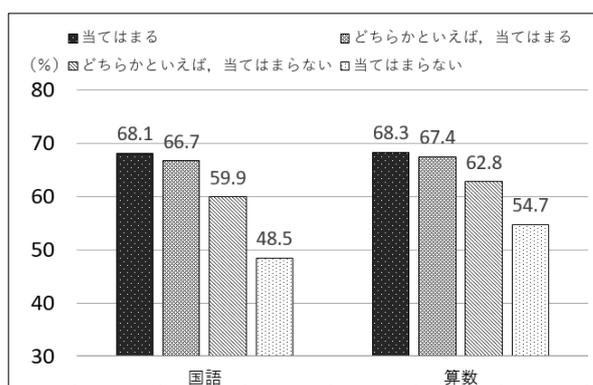


図4 「道徳で、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいるか」と平均正答率

### 読書と正答率

図5からは、松本市の児童は、全国と比べて読書が好きな児童の割合が高いことが読み取れます。これは、各校で日常的に全校読書の時間を位置付けたり、地域の方々による読み聞かせの活動を行ったりしてきたことなどが背景として考えられます。

図6は、「読書は好きですか」の質問について、回答と各教科の平均正答率との相関図です。読書が好きな児童ほど正答率が高くなっています。これは読書の習慣が学力により影響を与えることを改めて示していると言えます。

読書は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、よりよく生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものです。今後も学校だけでなく家庭にも働きかけながら、魅力ある読書活動を展開していく必要があると考えます。

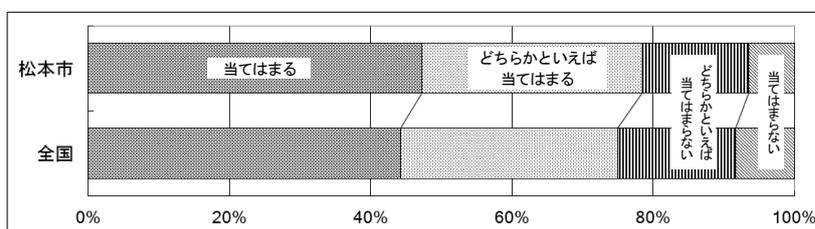


図5 「読書は好きですか」

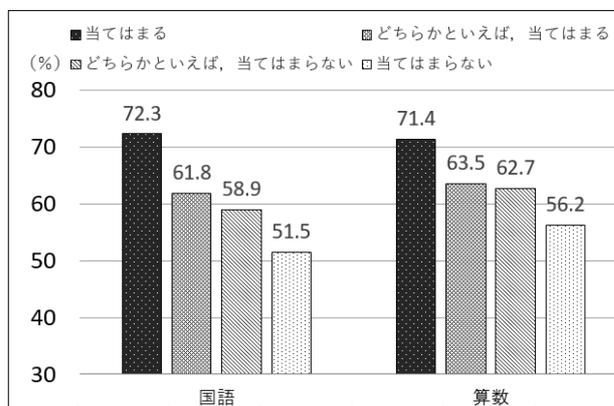


図6 「読書は好きですか」と平均正答率

### 総括

「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか」の質問では、自ら課題の設定と振り返りを行ったり、人との関わりを通じて考えを広げたりする学習をしていた児童ほど正答率が高い傾向でした。学級活動や道徳同様、これまでの各校での教育実践の蓄積を生かしつつ、児童が課題解決に向けて主体的に学びに向かえるよう児童の立場に立った関わりを意識し、確かな学力を育成するための授業改善を進めることが大切です。一方、基本的な生活習慣における質問では、休み時間や放課後、休日に学校や地域の図書館に行く機会や新聞を読む頻度がここ5年間、少しずつ低くなっています。テクノロジーの普及などで活字離れが進行している状況下で、言葉への感性を磨き、表現力や創造力を豊かにするためにも、学校、家庭、地域が連携して、教育活動に取り組んでいく必要があると考えます。